



人式が減っているから、こつちも意地になつてね(笑)、全国各地を飛び歩いて着付け教室を開いたりほとんど家にいないですよ、私」

滋賀県で着付け教室をしたその足で岐阜へ行き、新潟へ行き、と、まるで成長企業の経

営者のように、80歳を超えた今も動き続けている。

「後から来る人たちに技を伝えないと、なくなっちゃうのでしょ、日本の文化が」

着付けの中には、千年を超える膨大な文化の情報が含まれているのだ。着付けとは、

単なる美容の1ジャンルではない、過去からの文化遺産を受け渡す、重要な技術だ。そう言つと、「そんなに大げさなことじゃないわ」と戸部さんは笑つた。その顔は、人形遊びをする童女のようなつた。



PROFILE

とべ さちえ

大正13年、新潟で40年続く旧家に生まれる。東京の女学校を卒業後、都内の美容院に就職。戦争、結婚の中断を挟みながら美容・着付けの仕事が続け、昭和31年に藤沢市に卜へ美容室を開業。以来現在に至るまで現役の着付け師として数百名の後進を育て、数え切れない花嫁の着付けを手がけてきた。日本唯一の宗師(着付け師の最高位)。平成17年、現代の名工に選定。

職人の技

シリーズ 着付け師

戸部幸枝さん



文 = 篠塚義成
text: Yoshinari Shinozuka
写真 = 竹達照夫
photo: Teruo Takedachi

初めての女性職人の登場である。着付け師。正直言って、着付けにワザがあると考えたことはなかった。しかしそんな思いは、戸部さんが実演してくれた着付けを目の前に見て、吹っ飛んだ。

戸部さんの着付けの歴史はまさに向上心の歴史だ。昔からきれいなものが好きで、父の大事にしている菊を切ってお人形を飾ったりして怒られていましたよ」

「他の人がいかげんな着付けをしているのを見ると、あんなへたにはやるまいと笑。寝ていても新しいアイテアがぶと浮かんでね、夜中の1時でも2時でも飛び起きて、マネキンなんてないから大黒柱に帯を締めて練習ですよ」

「着物の着方には、一定のルールがある。しかし人間の体型は千差万別なので、ルール通りでは見栄えが良くないこともある。基本を少し崩すことで新鮮な魅力も生まれる。自然な流れとして、戸部さんは創作帯結びなども手がけるようになる。それを見て弟子入り志願する人も増え、後に数百名という門下生を抱えるようになっていく。

「創作をやっていると、平安貴族はどんな着付けをしていたんだろっ、大奥はどうだったんだろっなんて知りたいことが増えましてね。50歳を過ぎてから、京都に通って本格的に古典の勉強を始めました。これが深いんですよ。いくら行っても奥があるの」

「当時は女が働くというのが不名誉なことだね。でも夫を亡くした人たちが何もできずに呆然としているのを見て、ああはなりたくないと思ったんですよ。女学校の友人が美容師になるというので私も面接と一緒に付いて行ってその

「着付けには人柄が出るんですよ」と戸部さんは言う。ならば「の端正な美しさは、戸部さんの人柄なのであろう。」

同じ花嫁衣装でも、武家と公家ではしきたりが違う。どこまで古典をふまえ新しいアレンジを施すか。戸部さんは今も、工夫に余念がない。「最近では和装での結婚式や成

「着付けには人柄が出るんですよ」と戸部さんは言う。ならば「の端正な美しさは、戸部さんの人柄なのであろう。」

「着付けには人柄が出るんですよ」と戸部さんは言う。ならば「の端正な美しさは、戸部さんの人柄なのであろう。」

着付けには、千年の歴史が宿っています。それを伝えないと、文化が消えちゃっつ。

「最近では和装での結婚式や成